

民族歌舞とショー・ビジネス

－雲南省昆明市・世博吉鑫園の《吉鑫宴舞》の事例を中心に－

長谷川 清

Show Business and Ethnic Performances:

A Case study on *JIXIN* Banquet Dance Performance in Kunming city, Yunnan Province

Kiyoshi Hasegawa

In this paper, I will focus on the issue of commodification of Yunnan ethnic cultures, one of China's multi-ethnic frontiers. Since the beginning of the open-door policy, ethnic minorities in Yunnan province have been the target of tourism development. Their utilization as cultural resources for profit has accelerated in aspects of local history, ethnic customs and traditional cultures. Recent is a case in point interest in ethnic dances as a cultural tool for show business. I examine the relationship between cultural resources and tourism entertainment by organizing and analyzing materials related to *JIXIN* Banquet Dance Performance (*Jixin Yanwu* 吉鑫宴舞).

1. 問題の所在

中国では1980年代以降、改革開放政策の影響を受け、諸民族の風俗習慣やエスニックな民族／民俗文化を資源として活用する観光化が進行した。この動きは「文化の商品化」として興味深い現象でもあったが、少数民族が多く居住している観光地では、民族歌舞ショーを上演する観光村や劇場、民族料理のレストラン（民族餐廳）が多く出現し、観光客

を呼び寄せるスポットになった。こうしたエンターテインメントの鑑賞と飲食が結びついた文化消費のかたちは「歌舞伴餐」「歌舞伴宴」と称され、中国各地で1990年代以降に普及した。目新しさも手伝って、民族歌舞ショーは観光客も含めて多くの人びとを魅了したが、経済的な活性化にも利用され、物産交易会や経済技術協力に関する商談会のエンターテインメントの演目に加わっていくのである。

「民族文化大省の建設」という発展戦略を1996年に打ち出した雲南省では文化体制改革を推進し、歌舞団や舞踊チームが民間でも組織され、その積極的な活用が行われていくことになる。「民族文化を繁栄させ、文化産業を発展させ、文化大省を建設する」というスローガンのもと、それを具体化するための諸方策を明確にし、文化体制改革を断行したのである。こうした発展戦略は、雲南省に居住する諸民族の文化資源を活用した観光開発や観光文化の創出、民族文化の商品化・産業化の動きを加速させていくが、「雲南現象」として人々の高い関心を集めるまでになった。注目に値するのは、これらの取り組みはその地政学的な優位性を地域経済の発展戦略に組み入れ、東南アジア、南アジアとの結びつきを強化する雲南省の対外開放政策と緊密に結びついていた点である。

雲南省昆明市の「世博吉鑫園」において上演され、雲南の少数民族の多彩な民族歌舞が鑑賞できるエンターテインメント・ショーとして人気を集めた《吉鑫宴舞》はその典型的な事例である。この歌舞ショーは古代雲南の滇国や南詔国の歴史・風俗、伝説、恋愛や婚姻習俗といった少数民族の伝統的な生活文化を題材にして創作された舞台芸術であったが、雲南各地のローカルフード（滇味、滇菜）と「民族風情」を同時に楽しめることで必見のアトラクションとなり、中国内外の旅行社が企画する雲南観光のツアーにも組み込まれ、最盛期には連日多くの客でにぎわっ

た。世博吉鑫園が創業した民族歌舞のショー・ビジネスは雲南における対外開放の恩恵を受けつつ、民族文化の商品化を促す契機として、観光マーケットの創出にも寄与することになったのである。

小論は《吉鑫宴舞》がいかなる社会的・経済的・文化的状況のもとで出現し、ショー・ビジネスとしてどのように発展し、雲南省における文化産業の成功例とみなされるまでになったのかについて、関連資料の収集と整理の作業を進めつつ、初歩的な考察を試みるものである。

2. 中国における旅游演芸と文化産業

中国の観光業において諸民族の歴史・伝説や民間舞踊、民俗的慣行などに題材をとったエンターテイメント・ショーは中国（語圏）では「旅游演芸」として、「旅游文化」の主要なジャンルとなっている。こうした旅游演芸の起源については、関係者や研究者の間では陝西省歌舞院古典芸術団が1982年に古都・西安で上演した《仿唐樂舞》が重要な契機となったと指摘されている。当初、来訪した国家首脳や政府要人を接待することがその主たる目的であったが、西安の観光化の進展に伴い、《仿唐樂舞》は「仿唐樂宮」と称される劇場型のレストランで上演されるようになった。この施設は唐代風の装飾を施し、600人程度の客を収容することができる芸術的雰囲気漂う大型施設であり、1988年の開業以来、西安を訪れる観光客に人気のスポットでもあった¹⁾。

《仿唐樂舞》は舞台芸術の鑑賞とレストランでの飲食を結びつけた観光産業の手本のような存在であった。筆者も中国短期留学（1990年8月）に参加した学生たちを引率して訪れたことがあり、宮廷風の衣装をまとった男女の踊り手による華やかな演舞や古典音楽の調べを楽しんだ記憶が残っている。

旅游演芸の発展にはテーマパーク型の娯楽施設における民族歌舞

ショーの演出が深く関わってきた点を見ておく必要がある。広東省の深圳に建設された「錦繡中華／中国民俗文化村」は、中国を特色づける歴史的建築物のミニチュアや少数民族の民族文化を展示したテーマパークとして知られるが、開業当初から民族歌舞ショーや諸民族の祭り、習俗を題材としたパフォーマンス、アトラクションなどが見世物として来訪客に提供された点で注目できる。

「錦繡中華」は30ヘクタールの広大な用地に中国各地の著名な建築物（万里の長城や故宮、ポタラ宮、莫高窟など）や自然景観のミニチュアを配置した施設であり、「中国民俗文化村」は諸民族の生活文化と習俗を主たる展示対象とした施設である [李小妹 2012]。香港中国旅行社と深圳華僑城経済発展総公司の投資によって建設されたが、1995年から上演されるようになった民族歌舞ショーの《中華百芸盛会》は、同じく深圳のテーマパーク「世界の窓」の演目となった《欧州之夜》とともに、当時話題を集めたアトラクションであった。

2000年代に入ると、観光産業と結びついたパフォーマンス芸術としての民族歌舞ショーの興行が中国各地でさかんになっていく。上演人数や内容構成の大型化とともに、演出方法や舞台設定において多様化が進んだが、《印象・劉三姐》、《宋情千古情》などはその典型例と言える。《印象・劉三姐》は2004年、桂林の陽朔で上演されたが、中国を代表する映画監督、張芸謀がその演出に関わったことが話題になった。同地区を流れる漓江の風光明媚な景観をパフォーマンスの舞台として活用した中国初の野外ショーであった点で、中国における旅游演芸の歴史に新しいページを開くことになったのである [王偉年 2009]。

3. 雲南における旅游演芸と民族歌舞ショー

観光産業が発展しつつあった雲南省では「民族文化大省」の建設が

政策として打ち出されたことを受けて、少数民族の歌舞表演を活用した旅游演芸はその民族的な多様性を基礎に特色のある内容となっている。2000年前後の時期に雲南で創作された旅游演芸をまず確認しておこう [張曉瀾等 2015 : 37-42、施惟達等 2011 : 56-57]。

以下の作品が代表的である。《納西古樂》(麗江、1997年)、《吉鑫宴舞》(昆明、大型歌舞伴餐、2000年)、《麗水金沙》(麗江、大型旅游歌舞晚会、2002年)、《瀾滄江・湄公河之夜》(西双版纳、原生态歌舞篝火晚会、2003年)、《雲南映象》(昆明、大型原生态歌舞集、2003年)、《勐巴拉娜西》(西双版纳、超級歌舞秀、2004年)、《蝴蝶之夢》(大理、大型夢幻風情歌舞、2005年)、《雲嶺天籟》(昆明、大型原生态民族音樂集、2006年)、《印象・麗江》(麗江、大型山水实景演出、2006年)、《潑水節・印象》(西版纳、大型山水实景演出、2006年)、《香巴拉映象》(香格里拉、情景歌舞劇、2006年)、《花腰放歌》(石屏県、大型民族歌舞、2007年)、《重彩・佧山》(滄源、大型佧族歌舞樂、2008年)、《雲南的響声》(昆明、大型原生态歌舞集、2009年)、などである²⁾。カッコ内の大型歌舞伴餐、大型旅游歌舞晚会、大型原生态歌舞集といった用語は、上演形式や演目の属性、舞台装置の違いなどをもとにした便宜的な類型化である。

民族歌舞ショーは様々な文化空間や社会的景観の中で上演されるが、レストランなどの飲食施設での演出形態が重要である。雲南省ではエスニック観光を組み合わせ、民族歌舞のエンターテイメント化、商品化が進行する。その結果、特色のあるローカルフードやエスニック料理と民族歌舞ショーの演出を結びつけた「歌舞伴餐」、「歌舞伴宴」という消費スタイルが流行していくのである。こうした民族歌舞ショーの上演がいつから始まったのかは不明なところが多いが、その嚆矢は1980年代初期に昆明市内の南園飯店で始まった「樂舞餐」が有力視されている [陳・黄・唐 2017 : 378]。

省都としての昆明や石林（撒尼族）、麗江（納西族）、大理（白族）、西双版納（傣族、哈尼族、基諾族）、紅河（哈尼族）などのエスニック観光のスポットでは、民族歌舞ショーを上演するホテルやレストランに連日大勢の観光客が訪れた。舞台上で演じられるエキゾチックな歌舞や音楽、少数民族独自の恋愛や婚姻習俗のパフォーマンス、テーブルに並ぶ名物料理などを楽しみ、ひとときの開放感を味わうことができたからである。筆者も1990年代以降、フィールド調査のために雲南を何度も訪れているが、調査地の一つであった西双版納ではレストランで上演される民族歌舞ショーを多数鑑賞した経験を有している。

改革開放と市場経済の拡大するなか、大型の民族歌舞ショーや文芸晚会は経済フォーラムや物産交易会、商談会などでは主催者側が企画した。文化イベントの開催は、ビジネス関係者同士の交流やコミュニケーションを促す上で効果的であり、雰囲気盛り上げた。当時さかんに唱えられたスローガンに「文芸搭台、経済唱戲」（文芸が舞台を組み、経済が劇を演じる）があるが、こうした言い回しは市場経済と文化消費が緊密に関係を持ち始めたことを意味している [張 1997 : 70-73]。

4. 雲南吉鑫集団の発展過程

《吉鑫宴舞》は「雲南吉鑫集団股份有限公司」（以下、雲南吉鑫集団と略する）の系列下にある世博吉鑫園が創作した、エンターテインメントとしての舞台芸術である。まず、この企業集団の成立過程を見ておこう。

雲南吉鑫集団の前身は、過橋米線を扱う「吉鑫園」という飲食店である。1990年9月、昆明市内の南華街に開店した。「過橋米線」とは、雲南省に由来するローカルな麺料理の一種で、煮えたぎったスープと油が入った磁器の碗または土鍋に「米線」（ミーシエン）の他、鶏肉、ハム、うずら卵、豆腐皮（湯葉に似た豆腐加工品）、野菜などを入れて食べる。

今日、昆明市内だけでも相当数の店舗があるが、吉鑫園が開業した時期は雲南の観光化が進展し、ガイドブックなどでも必ず紹介され、雲南の名物料理としての評判と地位を築きつつあった。当時、建新園、橋香園などが支店（分店）を開業し、事業規模を拡大していたのである。

そうしたなかに吉鑫園も参入した。創業したのは白族出身の李麟（1958年生まれ）という人物である³⁾。彼は従業員に民族衣装を着せ、「民族特色」を売りにして他店との差異化を図ったが、食器や店内の衛生管理にも注意を払ったこともあり、専門店として客の心をつかむことに成功した。その経営は順調で、吉鑫民族文化走廊（二分店）、（93年9月）、吉鑫園滇味城（三分店）、（94年9月）、護国吉鑫園（四分店）、（96年9月）、上海吉鑫園（四分店）、（97年9月）、金星吉鑫園（五分店）、（98年9月）などを開業していった。

このように店舗数は増えていったが、それだけではない。李麟は企業としてのさらなる事業拡大と新たな業界への挑戦をめざしたのである。当時、大部分の企業経営者は文化産業の重要性をまだ十分には認識していなかった。これに対し、李麟は吉鑫園を基軸に文化産業を発展させることを構想し、「吉鑫園企業発展総公司」（1993年5月）を設立した。その経営方針は、雲南の民族・地方の称揚と料理・食文化（滇味と称される）の振興を謳い、「滇味大師」として知られる解徳坤の技芸を継承するために、民族歌舞ショーとレストラン経営を結びつけるというものであった⁴⁾。

そのための専門店として開業したのが上述の「吉鑫園滇味城」である。店内には1500名が同時に飲食できるスペースを確保し、雲南の諸民族の建築物の要素を取り入れた大型の舞台装置を作り、少数民族の青年男女による民族歌舞ショー「吉鑫之夜」や民族衣装のファッションショー、三道茶（白族の習俗）のパフォーマンス、刀剣を付けた梯子での雑技（上刀山）などの演目を提供したのである⁵⁾。

李麟の事業経営の多角化は、吉鑫園企業発展総公司の他、吉鑫旅游商贸公司、吉鑫園古典裝飾公司、吉鑫私立博物館（以上、93年5月）、吉鑫古典工芸家具廠、吉鑫文化礼品公司、吉鑫民族歌舞团（以上、94年5月）、吉鑫古玩市場（97年5月）、雲南省吉鑫集团股份有限公司（98年5月）、世博吉鑫園飲食文化城（99年4月）、昆明軟件園信息産業公司、吉鑫民族旅游工芸品廠（以上、99年5月）などの創設に見ることができる。

雲南吉鑫集團の事業展開のこうした動きは当時、文化産業の成功例として大きな社会的反響を呼び、李麟はさらに大きなチャンスを手にしていく。それは昆明市で開かれた「世界園芸博覧会（略称は世博会）」（1999年4月開幕）への参画であった。江沢民が開幕式のレセプション（国宴）を主催することになり、その会場に世博吉鑫園飲食文化城（通称「世博吉鑫園」）が指定されたのである。この宴会場施設は「国宴廳」と命名された。

5. 吉鑫宴舞の創作

「世博吉鑫園」の経営にあたり、李麟は《吉鑫宴舞》の上演をその基軸に据えた。パリ、パッタヤーを含め、ヨーロッパやアジア諸国を自ら視察し、ショー・ビジネスについてアイデアを練ったが、新たに創作された《吉鑫宴舞》を世界の3大「YAN」舞の1つであると宣伝した。彼の独創性は、3つの「YAN」（艶、燕、宴）舞として、パリのムーランルージュのキャバレーショー「艶舞」（夜総会式）、タイ国の一大リゾート、パッタヤーのニューハーフ（中国語では「人妖」）ショーの「燕舞」（劇場式）と並べ、《吉鑫宴舞》は中国では長い伝統を持つ「宴舞」（宴会式）であると説き、独自のマーケティング戦略を展開した点にある⁶⁾。

《吉鑫宴舞》は2000年4月10日、昆明で第1回の国際旅游節が開催さ

れたときに盛大に披露された [満子 2000]。同年5月には吉鑫民族宴舞演芸有限公司が発足したが、以下の6つの演芸団体から構成されていた。すなわち、吉鑫民族宴舞芸術団、吉鑫民族土風歌舞団、吉鑫民族模特展演団、吉鑫合唱団、吉鑫大理民族歌舞団、吉鑫版納民族歌舞団である。これらの演芸団体には総勢で480人余りが雇われており、当時としては国内で最大の民間芸術団体とされた⁷⁾。

2000年7月2日、第1回中国民族服装博覧会開幕式のレセプション(晩宴)が世博吉鑫園の国宴廳で挙行された。この時には全7場からなる歌舞ショー《七彩雲霞》が上演されたという。その後、昆明での服飾、貿易、花卉などの国際フェア開催における大規模なレセプションを通じて改訂を重ね、「南詔宴舞」、「滇人羽舞」、「雪域春風」、「秘境馬幫」、「聖潔燭光」、「酒歌敬客」、「婚俗奇趣」、「七彩雲霞」、「高原盛会」などの舞台作品が完成されていったのである [張楠 2003 : 375-376]。

2000年代前半における《吉鑫宴舞》についての資料(映像、写真を含む)は多くない。そうしたなかで、VCD版『中国吉鑫宴舞』(雲南民族文化音像出版社)は、世博吉鑫園の舞台上で上演された歌舞ショーを編集して制作された映像コンテンツとして貴重である。観光用の土産品として販売されたものだが、筆者は調査地の西双版纳で購入した。

その収録時間は45分ほどの内容だが、第1章「南詔宮宴」、第2章「滇人羽舞」、第3章「婚俗奇趣」、第4章「秘境馬幫」、第5章「七彩雲霞」、第6章「聖潔的祝福」からなる。ケースには《吉鑫宴舞》の舞台創作に関わった振付師の名前一疆嘎(芸術総監)、陶春、馬文靜、侯躍、劉玲、楊可佳一が明記されており、これによってどのような立場の人物や団体組織が《吉鑫宴舞》の創作に関わったのかを明らかにすることができる。以下、これらの人物の経歴を確認していくが、結論から言えば、彼らは雲南省舞踏家協会のメンバーであり、振付師として劇場施設や舞

踊学校、大学教育などで活躍していた人々である。

疆嘎（生年は不明、男）は国家一級の振付師であり、雲南省舞踏家協会副主席であった。雲南吉鑫集団の執行総裁、雲南吉鑫宴舞演芸有限公司総経理の役職を務めた。彼が制作に関わった作品には、吉鑫園滇味城《土風歌舞》、昆明世博吉鑫園《吉鑫宴舞》、第1回民族服飾博覧会《七彩雲霞》、新版《吉鑫宴舞》などがある。

陶春（1962年3月生まれ、布朗族、男）は雲南省文芸学校舞踏専業を修了し、国家一級の振付師で雲南省歌舞劇院院長を務めている。1992年、陶春は趙恵和、周培武、蘇天祥らとともに、彝族舞劇《阿詩瑪》（雲南省歌舞劇院）の創作と振り付けを担当した。

馬文靜（1943年7月生まれ、回族、女）は中国少数民族舞踏家学会常務理事、雲南省舞踏家協会副主席、昆明舞踏家協会主席、国家一級の振付師である。また、劉玲は傣族舞踏《水中月》の振り付けの他、王偉軍とともに《白潔聖妃》（雲南省京劇院）における白潔夫人の舞踏を担当している。侯躍は1995年、王敏佳、段勇らとともに瑶族舞劇《瑶山之火》（紅河州歌舞団）の創作に関わっている。楊可佳は1995年、周培武、陶春、趙恵和とともに舞踊劇《澆水節》（雲南省歌舞団）を担当している。彼らの舞踊創作について確認できたのはその活動の一部分にすぎないが、いずれも1990年代から2000年代にかけて活躍していた人物であった⁸⁾。

次に、VCD版『中国吉鑫宴舞』の演目を見ていこう。6つの章からなるが、基本的に《吉鑫宴舞》の演出に沿ったものとなっている。時刻表示の数字は関連映像の開始時間を示している。映像のなかで名称が紹介されている舞踊作品には*印を付すが、名称が不明なものについては、簡略な場面説明で処理した。

第1章「南詔盛宴」の演出内容は以下のとおりである。

長いラッパを吹く男性 5:28、儀仗の旗を持った兵士の入場 6:20、

南詔王の入場 7 : 04、* 彝族跳菜舞 7 : 34、* 南詔宮廷舞 10 : 00、彝族大褲脚舞 11 : 42、* 佤族甩髮舞 12 : 26、西域龜茲樂舞 13 : 16、* 白族迎賓舞 14 : 25、南詔王や王妃、宮女、家臣が壇上から舞台中央に出てきて、王が乾杯し、賓客を歓迎する 15 : 37。

この後、吉鑫宴舞の紹介、李麟による吉鑫園の歴史や民族文化大省の建設との関係に言及する内容のテロップ、テーブルでの飲食風景、厨房、各種の料理などの映像が流れる。

第2章「滇人羽舞」の演出内容は以下のとおりである。

雲南の古代の歴史と青銅器時代についてのテロップによる説明があった後、古代滇国の習俗（紡績に従事する女性など）を題材とした舞踊 18 : 40、踊り手たちによる観客への記念品の贈呈 21 : 50。

第3章「婚俗奇趣」では雲南の諸民族の生活習俗（恋愛や結婚など）をテーマとした舞踊が演じられる。哀牢山地区の風俗を表現した「小河淌水」22 : 12、彝族の風俗を表現した「花靴掉在河中間」23 : 40、「蘆笙恋歌」25 : 00、若い男女を囲んで踊る「阿得的」25 : 53、などである。

第4章「秘境馬幫」は雲南の歴史と少数民族地域の生活習俗を題材としている。狩猟生活の女性たち 27 : 30、* 哈尼族銀鈴舞 29 : 02、* 祭祀舞（彝族の宗教的職能者ピモの祭祀を模している）30 : 02、などが演じられる。

第5章「七彩雲霞」は民族衣装のファッションショーである。現代的にアレンジ、デザインされた諸民族の豪華な民族衣装をまとった男女のモデルたちが次々に登場する。順番は、* 古滇羽人服飾 33 : 40、* 愛尼服飾 34 : 01、* 呑口服飾 35 : 06、* 雲南民族服飾 35 : 50、* 花腰傣服飾 36 : 18、* 金銀服飾 36 : 47、* 青銅服飾 37 : 25、* 民族盛装 37 : 00、である。

第6章「聖潔的祝福」は傣族の舞踊で構成される。* 傣族荷花舞 38 : 20、* 趕擺舞 40 : 25、* 燭光舞 41 : 15、* 長甲舞 43 : 30、* 菩薩蛮舞 44 : 34、という順で演じられる。

以上がVCD版『中国吉鑫宴舞』から明らかになる演目の内容である。この他、雲南と昆明の概況、青銅器時代、古代滇国の習俗、南詔国の歴史、馬幫の役割、李麟による吉鑫園と吉鑫宴舞の紹介、雲南の文化政策や民族文化大省との関係、飲食風景、厨房、各種料理などについて映像と文字テロップ、ナレーションが随所に盛り込まれている。

《吉鑫宴舞》では雲南少数民族の様々な舞踊が多数上演された。これに対し、インターネット上にはどのような写真資料が残されているのだろうか。吉鑫宴舞で検索してみたところ、『半老人』というタイトルの付いたブログがあり、計49枚の写真が残されていることが分かった。いずれも2006年8月21日にアップロードされたものである。このブログ記事は四川省の成都から発信されているが、暑い成都を離れて避暑をかね、昆明で会議が開催された際、主催者側の招待を受けて《吉鑫宴舞》を鑑賞することができたと著者は述べている⁹⁾。

これらの写真資料の舞踊シーンは上記のVCD版『中国吉鑫宴舞』の各演目と上演の順序が同じであり、同一の人物が多いという点を確認できた。49枚いずれの写真にも舞踊の名称は付されていないが、VCD版『中国吉鑫宴舞』の映像資料と照合することによって演目の順番や主要な舞踊の名称を特定することができる意義は大きい。以下、舞踊の名称が特定できた写真資料については、VCD版『中国吉鑫宴舞』で使われている名称を記し、*印を付すことにした。列挙した順番は上演された時間の流れに沿っている（括弧内は写真の枚数を示す）。

【ブログ資料①】 角笛の吹奏、南詔王が登場する前の玉座と侍女など（3）、*彝族跳菜舞（2）、*南詔宮廷舞（6）、*彝族大褲脚舞（1）、*佤族甩髮舞（3）、*西域龜茲樂舞（4）、象牙の献上（1）、*白族迎賓舞（1）、南詔王と臣下たちの歓迎（1）、王妃（1）、*滇人羽舞（3）、

飲食する観客（1）、骨董品のオークション（1）、原始時代の女性（1）、
*哈尼族銀鈴舞（4）、*荷花舞（3）、*趕擺舞（7）。

6. 新版《吉鑫宴舞》の資料整理

新版《吉鑫宴舞》は舞踊、音楽、俳優から舞台、照明に至るまで旧バージョンを全面的に改訂したとされている。その初演は2007年1月18日であったが、この時期に新版《吉鑫宴舞》を鑑賞した『春城晚报』（雲南日報社が発刊する夕刊紙）の張娟によれば、演出には総勢160名の演員が登場し、演習時間90分、全5場からなる大型の民族歌舞ショーであった。背景音楽を担当したのは中国では著名な作曲家の伍嘉冀（1955年生まれ、漢族）である。彼は電子音楽によるR&B的な手法を採用した。また、演員たちの衣装を担当したのは韓春啓（1954年生まれ、漢族）である。彼は当時トップデザイナーの一人と目されていた¹⁰⁾。

演目の構成は、第1場「南詔宮宴」、第2場「秀色可餐」、第3場「花腰風情」、第4場「聖潔祝福」、第5場「七彩雲霞」であった。第1場では、南詔王の登場、料理を頭上で運ぶ16名の跳菜人による舞踊、奉聖樂舞、大褲脚舞、甩髮舞、亀茲樂舞が演じられ、南詔王と西南各国の使者との謁見シーンなどが演じられた。第2場は演出を担当した振付師の侯躍（前述）の説明によればとして、彝族人の「脚」、景頗人の「肩」、阿佤人の「髮」、花腰傣の「臍」を芸術化した舞踊であるとしている。別な資料（昆明康輝旅行社のウェブサイト）では奕車人（紅河地区の哈尼族支系）の脚、景頗族の肩、佤族の頭髮、花腰傣の肚子（腹部）となっている¹¹⁾。

第3場では花腰彝族の海菜腔、烟盒舞、花腰快調などの舞踊を上演する。第4場は檀伽舞、穿灯舞（昆明康輝旅行社のウェブサイトでは船灯舞と表記）、千瓣蓮花舞など、傣族の舞踊が中心である。千瓣蓮花舞では傣族の民間伝説として著名な孔雀公主ナムノナ（楠木諾娜）と孔雀の仙

女たちが池で戯れている情景を描き出し、森の中での野生の孔雀たちの姿態を演じている。第5場は民族衣装のファッションショーを演出する。同じく昆明康輝旅行社のウェブサイトによると、ファッションショーは古滇国羽毛服飾、古滇国青銅服飾、孔雀服飾、活力多彩服飾、民族銀飾服飾、十二中民族男裝服飾のシリーズ（系列）からなるとしている¹²⁾。

以上のことから、新版《吉鑫宴舞》がどのような内容構成をとっているのかが推測できる。《吉鑫宴舞》の調査研究を行った于漪（2013）は《吉鑫宴舞》が1時間40分の演出において雲南25民族の26種類の舞踊を展示するとしている。彝族大褲脚舞、跳菜、烟盒舞、拍手舞、藏族鍋庄、旋子、白族霸王鞭、景頗族銀泡舞、哈尼族銀鈴舞、佤族甩髮舞、納西族舞踏、傣族孔雀舞、仏教舞踏、仏教長甲舞、蠟条舞、羽舞、獸皮舞、漢族荷花舞、苗族舞踏、緬甸舞踏、朝鮮舞、新疆舞、印度舞、安南金族舞踏などの他、各国の使者が南詔王に謁見する場面では夜郎国、安南国、天竺国、高麗国、龜茲国、吐蕃国、瓢国、花馬国（麗江）が登場するのである [于漪 2013]。

2007年以降の新版《吉鑫宴舞》が具体的にどのような舞踊作品であったのかについては、上述のVCD版のような映像コンテンツがないため、その実態把握には別の方法に拠るしかないが、そうした空白を埋める上で参考にできるのは、インターネット上で検索できるブログにアップロードされた画像やYou Tubeの動画などである。2007年以降については、観光行政の関係者、旅行・グルメ関連の企業関係者、作家、学者、個人旅行者によるブログがインターネット上に残されていることが今回確認できた。それらは、舞台上で繰り広げられる数々の舞踊作品や食事・観劇風景、施設内のインテリア・展示物、料理のメニュー、パンフレット類などを記録している点で、空白部を補うことができる貴重な資料だと言える¹³⁾。

以下、撮影日時が確定できる資料だけに限定して整理してみたい。最大の難点は、これらの写真はいずれも新版の《吉鑫宴舞》を鑑賞した人がそれぞれの関心に基づいて撮影したものを趣味や興味の対象として紹介しているだけで、資料整理に不可欠な舞踊の名称などの基礎情報が示されていない点である。しかし、上述した2007年以前の《吉鑫宴舞》や踊り手たちの衣装や道具、身体の所作などを総合すれば、個々の写真がどの舞踊に当たるかについて一定程度の整理は可能となることが分かった。舞踊の名称が特定できた資料については、VCD版『中国吉鑫宴舞』で使われている名称を記し、*印を付すが（括弧内は写真の枚数を示す）、上述の【ブログ資料①】と同様の扱いとする。なお、【ブログ資料③】では写真右下に撮影された時刻が表記されている点は特筆すべきである。これによって《吉鑫宴舞》の演目構成や時間的展開がより明瞭となるからである。

【ブログ資料②】 ブログの作者（ブログ名：黄安年的博文）は2007年4月21日に15枚の写真、2007年5月16日に19枚の写真をアップロードしている。ブログには2007年4月21日の午後、北京からのフライトで昆明に到着し、その晩、G&L夫妻の出迎えて世博吉鑫園に行き、鑑賞したとしている。しかし、写真は4月20日の日付となっている¹⁴⁾。

撮影内容の内訳は以下のとおり。世博吉鑫園の外観（1）、世博吉鑫園入口付近（1）、レストラン壁の彫塑像（1）、自分たちの予約席（1）、儀仗旗を持った兵士たちが写る宴舞と観客席（1）、*彝族大褲脚舞（1）、*白族迎賓舞（1）、大きなスクリーンに映し出された花腰傣と舞台上で演じられる花腰傣の舞踊（1）、宴舞合間のオークション光景（1）、舞台上での舞踊の上演（4）、踊り手と観客との交流（1）、本人が写る記念写真（1）、民族衣装のファッションショー（3）、レストラ

ン廊下の展示物や装飾用レリーフ（3）、民族衣装を着た販売員（1）、《中国吉鑫宴舞》の宣伝パンフレット（12）。

【ブログ資料③】 ブログ記事の著者（ブログ名『隨意窩』「中國三大宴舞之吉鑫宴舞」）は42枚の写真をアップロードしている。著者は台湾からシンガポールに行き、そこで中国旅行のツアーに参加した。12月6日に昆明空港に到着し、市内観光を行ったと記している。いずれの写真にも撮影日（2008年12月12日）と時刻が入っている¹⁵⁾。

撮影内容の内訳は以下のとおり。*南詔宮廷舞 18：48（2）、*西域龜茲楽舞 18：51（1）、女性の舞踊 18：54（1）、女性の舞踊 18：57（1）、象牙の献上（1）、*白族迎賓舞 18：58（3）、大型スクリーン（棚田が映し出されている）をバックにした花腰傣の女性 19：10（1）、花腰彝族の女性 19：13（1）、長い頭髪の佤族女性の舞踊 19：17（2）、*烟盒舞 19：35（1）、客を接待する女性 19：40（1）、花腰彝族女性の舞踊 19：41（1）、花腰彝族女性の舞踊 19：43（2）、傣族の舞踊（女性）19：52、傣族の舞踊（女性）19：52、傣族の舞踊（女性）20：00（1）、民族衣装のファッションショー 20：16（2）、民族衣装のファッションショー 20：22（1）、世博吉鑫園の建物 20：37（1）。

【ブログ資料④】 ブログ記事の著者は作家（男性）である（ブログ名『作家張明的博客』）。「我的青春我的歌（第二部）（十七）」に17枚、「我的青春我的歌（第二部）（二十）」に9枚の写真をアップロードしている。著者は2010年11月12日、国全国公安文学芸術連合会と中国人民公安出版社が主催する「恒光杯」の授賞式が雲南省の紅河哈尼族彝族自治州の弥勒県で開催され、その帰途、乃古石林（昆明）を見学した後、吉鑫園で《吉鑫宴舞》を鑑賞したと記している¹⁶⁾。

撮影内容の内訳は以下のとおり。角笛の吹奏（1）、儀仗の旗を持つ兵士（3）、*南詔宮廷舞（2）、*彝族大褲脚舞（3）、*西域亀茲樂舞（2）、男性2人の舞踊（1）、*白族迎賓舞（4）、民族衣装のファッションショー（9）、その他（1）。

【ブログ資料⑤】 ブログ記事の著者（ブログ名『zlyang的博客』）は20枚の写真をアップロードしている。2011年8月、国際会議に参加するために雲南に赴き、主催者の招待で昆明世博園に行き、《吉鑫宴舞》を鑑賞したと記している。すべての写真に日付（2011年8月11日）が入っている¹⁷⁾。

撮影内容の内訳は以下のとおり。玉座にすわる南詔王（1）、*彝族大褲脚舞（1）、*西域亀茲樂舞（1）、高麗国の舞踊（女性）（1）、*白族迎賓舞（1）、大型スクリーン（棚田の風景）をバックにした佤族の長い髪の女性の舞踊（1）、大型スクリーン（風景）（1）、蓮の花を身に着けた女性と7羽の孔雀の舞踊（1）、オークション（1）、青銅器をデザインした古代滇国の舞踊（1）、大型スクリーン（来賓を歓迎する言葉が書かれる）をバックに整列した踊り手たち（1）、花腰彝族女性の舞踊（1）、民族衣装ファッションショー（1）、大型スクリーン（棚田の風景）をバックにした景頗族らしき女性の舞踊（1）、傘を持った傣族の女性の舞踊（1）、ろうそくの燭台を持った傣族の女性の舞踊（1）、画面不鮮明（1）。レストラン建物外部（1）、飲食風景（1）

【ブログ資料⑥】 ブログ記事の著者は中国の青島在住（2012年当時）の日本人女性である。日記のように日常生活や中国旅行のエッセイを更新している（2015年8月29日が最終回）。記事の内容から2012年5月末から6月初旬にかけて雲南旅行をしたことが窺われ、6月2日に57枚の写真をアップしている。前日に《雲南映像》を観たが、宿泊先のホテルで

「この地方に伝わる京劇のような芸能」を観劇したいと依頼したところ、世博吉鑫園を紹介されたと記している¹⁸⁾。

撮影内容の内訳は以下のとおり。鑑賞の際に世博吉鑫園の側が紹介した舞踊の名称を付記している写真（カギ括弧で表記一筆者）がある。儀仗旗を持つ兵士（1）、* 彝族大褲脚舞（1）、* 西域龟兹乐舞（1）、「高麗扇子舞」（1）、玉座にすわる南詔王（1）、女性たちの舞踊（1）、「婆南家族舞」（1）、「夜郎国苗族」の舞踊（1）、女性たちの舞踊（1）、「八角鼓と霸王鞭舞」（=白族迎賓舞）（1）、踊り手たちによる歓迎（1）、スクリーンに遠方の客を歓迎の文字（1）、棚田の映るスクリーンの前に花腰タイの女性（1）、女性の舞踊（1）、花腰彝族女性の舞踊（1）、男の踊り手による客との交流（1）、上半身裸の男たちの舞踊（1）、花腰彝族女性の舞踊（1）、森の中のタイ族女性と孔雀？の舞踊（1）、ろうそくを持つ女性の舞踊（2）、* 「長甲舞」（1）、「三面佛舞」（2）、傘を持ったタイ族の女性の舞踊（1）、民族衣装ファッションショー（14）、各種の料理（13）、建物正面（1）、正面玄関（1）、正面玄関の彫刻（1）、記念写真（1）。

7. 演出における歴史と文化資源の活用

《吉鑫宴舞》の演目には雲南少数民族の伝統的な舞踊（例えば烟盒舞）や新たな舞台作品がふんだんに盛り込まれ、歌舞ショーとしての娯楽性が追求されているばかりでなく、都市の消費文化としての性格を有している [于漪 2013]。

以上に検討してきたように、《吉鑫宴舞》は旧版と新版では舞踊の演出や演目においても違いがあるが、いずれも第1場は南詔王の宮廷演会 の場面を表現したものである。新版では舞台の上部には「太平盛世、歌舞昇平」という文字が記され、南詔王の治世が太平安泰であり、そうし

た中で南詔王の権威のもとに盛大な歌舞の饗宴が開かれている情景を演出している。この点は旧バージョンにはない特徴である。また、白族迎宾舞では白族女性による霸王鞭舞が加わっており、華やかで躍動感あふれる舞台となっている。他方、新版では第2場の「滇人羽舞」の内容は削除もしくは縮小されているように見受けられる。また、第3場もかなり変更されている。新版における「秀色可餐」の演目については資料不足から不明であり、これらの点については今後の資料発掘が必要である。この他、旧版では独立した1場を構成していなかった花腰彝族の風情を演出する「花腰風情」は新版の特徴であり、第4場とのコントラストが巧みに演出されている。第5場は民族衣装ファッションショーの演出において豪華さと華やかさが加味され、見ごたえのあるショーを構成している。

中国には「宴舞」というジャンルがあるとされる。王朝統治下の中国では皇帝の権勢を顕示する場として大規模な饗宴を開くという伝統があり、宮廷料理の体系化や宮廷舞踊の演目の多様化が進展してきたと説かれている。それは為政者にとっては、王朝統治の影響が政治的な権威を示す機会でもあった。中国王朝の歴史において、皇帝の権力と威光を背景として宮廷で演じられた様々な楽舞は、後代の人々からすれば、想像力を駆り立てられる「中華文化」の伝統である〔資華筠主編 1999：21-30〕。

《吉鑫宴舞》の場合、その舞踊ショーに歴史的な厚みを持たせる手法として、古代滇国の風俗や南詔国の「南詔奉聖樂」（南詔王の異牟尋が唐王朝に献じた宴饗樂）と関連づけられ、こうした歴史性を付与した演出によって《吉鑫宴舞》のブランド化と特色化が図られる点に最大の特徴がある。

すなわち、《吉鑫宴舞》では、雲南の歴史を演目のストーリー構成に利用しているが、元謀猿人の原始時代、楚国の将軍・庄蹻が雲南にやってきて滇池のほとりに建国したとされる古代の滇国、南詔奉聖樂につい

での記述などが残る南詔国の最盛期が参照されている。貞元16〔800〕年、南詔国の側から640人からなる大型の楽舞の使節団が長安に赴き、時の徳宗は徳麟殿でその演出を鑑賞したとされている。この南詔奉聖楽は唐代十四部楽舞の1つと見なされている〔袁禾 1999：95-97〕¹⁹⁾。

舞台作品の演出において「歴史」や「伝統」を結びつけることによって観客を歴史的情景の中に誘う手法はしばしば採られるが、《吉鑫宴舞》では第1場の南詔宮宴においての手法を用いている点は大きな特徴の1つである。当時どのような歌舞が南詔王の宮廷において演じられたかについてはもちろん不明であり、実際に世博吉鑫園の舞台空間において演じられるのは、ローカルな素材を加工・改作した現代の創作行為産物である。こうしたローカルな歴史・伝説、少数民族の歌舞、民族文化・習俗を結び付けた旅游演芸は、対外開放と経済開発、国境貿易、文化交流が推進されつつあった当時の中国社会の文化的状況が生み出したものである。

雲南各地の観光産業の発展と観光政策の変化により、多くの観光客はより自由度のある個人旅行を選択できるようになった。観光施設の改善、神秘的なシャングリラなどの魅力的な観光スポットの出現、直行のフライト便が開通したことなどによって中枢都市としての昆明の地位は大幅に低下していくことになった。団体ツアーの減少などにより大きな打撃を受けたのである。事業拡大を図ってきた雲南吉鑫集団は経営が著しく悪化し、債務超過のために、2014年8月に倒産した。それは、文化産業の展開における1つの時代の終焉をも意味していたのである²⁰⁾。

8. 今後の課題

雲南吉鑫集団が1990年代から雲南の民族文化の資源化や商品化、文化産業の発展に果たした役割は大きい。レストラン経営とエンターテインメントとしての歌舞芸術を結び付け、雲南少数民族の多彩な民族文化の存

在を全国的に知らしめたばかりでなく、それらのブランド化にも貢献した。《吉鑫宴舞》は吉鑫園演味城において民族歌舞ショーが上演された時期をその揺籃期ととらえても20年足らずの間に発展してきたものである。旧版と新版では舞踊の構成においても入れ替えや改作があり、演出面でも違っているなどを明らかにできたが、観光客向けの舞台芸術の創作、観光文化としての評価や他の民族歌舞のショー・ビジネス、旅游演芸への影響も含め、その実態については今後のさらなる資料発掘と調査研究が必要である。

注

- 1) 「郭洪钧：中国旅游演艺实践集成与案例解析（第七讲）」参照。
www.360doc.com/content/20/0923/23/41557638_937282806.shtml
〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
- 2) 尹欣・範建華主編 2010、362-397頁、同主編 2011、182-199頁。光映炯「雲南旅遊演藝產品品牌研究－以《雲南映像》」「旅游演藝」
<https://baike.baidu.com/item/%E6%97%85%E6%B8%B8%E6%BC%94%E8%89%BA/4057908> 〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
- 3) 李麟の経歴と企業経営の展開については、以下の資料を参照。「李麟」<http://m.zwbk.org/lemma/185152>、「吉鑫：舞動昆明文産龍頭」（2006年10月17日、雲南日報）<http://ent.sina.com.cn/x/2006-10-17/09591287643.html>、「從傳奇到伝説：650万房租压垮世博吉鑫園」（2016-01-11）https://www.sohu.com/a/53828445_339314 〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
- 4) 李麟の妻の祖父は解徳坤である。彼は国家特一級烹調師として、雲南の地方料理（演味）に詳しく、多くの資料を記録した。毛沢東、

周恩来などの調理人を務め、「滇味大師」「滇菜大師」と称賛された。亡くなる前、彼は自ら書き記した滇味名菜のメニューを李麟に残した。「人物 | 為毛澤東周恩來主廚3年半的滇菜大師昭通人解德坤！」
<https://kknews.cc/news/882zkq.html>を参照〔最終閲覧：2021年10月30日〕。

- 5) 民族衣装や舞踊の内容からみて、吉鑫園滇味城において佤族甩髮舞、白族霸王鞭、彝族大褲脚舞、烟盒舞などが上演されていたことを示す写真資料が残されている。「吉鑫滇味城－凶片－昆明『大衆点評網』」(<http://www.dianping.com>photos>)を参照。〔最終閲覧：2021年10月30日〕「吉鑫滇味城－凶片－昆明『大衆点評網』」(<http://www.dianping.com>photos>)を参照〔最終閲覧：2021年10月30日〕。また、YouTubeにアップロードされた動画資料によって、その民族歌舞ショーの一部をうかがい知ることができる。「中国雲南省の昆明の民族舞踊ショー1」(2分38秒、2010年9月24日アップロード)
<https://www.youtube.com/watch?v=MSdW9GOBNtA&t=9s>、「中国雲南省の昆明の民族舞踊ショー2」(1分9秒、2010年4月23日アップロード)
<https://www.youtube.com/watch?v=axgcP6bnNlo>〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
- 6) 世博吉鑫園の2階廊下を飾っていたのは大型壁画『世界三在“YAN”舞』である。壁画の大きさは長さ72メートル、高さ3メートルであり、ムーランルージュのキャバレーショー(紅磨坊艶舞)、ニューハーフショー(人妖燕舞)とあわせて、吉鑫宴舞の場面が描かれている。この壁画は昆明に拠点を持つ驪川企劃設計室の芸術家たちの創作である。雲南重彩裝飾画(中国の伝統的な工筆重彩画と民間芸術を融合した現代絵画で、少数民族を題材としたカラフルな色使いがその特徴)の手法と画風を採用している。趙崗「世界三大YAN舞壁画昨

- 亮相』『滇池晨报』（2001年11月7日）〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
- 7) 「去昆明看宴舞」（2007年2月13日）『中華工商時報』<http://finance.sina.com.cn/leadership/sxyyd/20070213/02093335071.shtml>〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
- 8) 以下の資料を参照。「核心団体-陝西百智論文旅産業發展有限公司 ddzwl.com/lists/3、「陶春」『搜狗百科 (sogou.com)』<https://baike.sogou.com/v99993708.htm>、「馬文靜」『百度百科 (baidu.com)』、「彩雲的神奇」（2006年8月18日、雲南日報）(ent.sina.com.cn/x/2006-08-18/11191206710.html)、紀芳芳「征程四十載，築筑夢新時代-雲南当代舞劇發展研究」（www.ynwy.org.cn/wypl/wyllyj/202106/t20210616_548411.html）〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
- 9) 「吉鑫宴舞-雲南旅游文化一瞥」（2006年8月21日）『半老人』、愛卡汽車社區四川論壇、<https://www.xcar.com.cn/bbs/viewthread.php?f=touch&tid=3866967>〔最終閲覧：2021年10月30日〕。これ以前の記録としては、『大衆点評網』という旅行・グルメ関係のブログに「吉鑫宴舞 吃客令狐冲」（2008年11月13日アップロード）というタイトルを付された写真がある。そのいずれにも2004年4月21日の日付がついている点で資料的な価値を持つと言える。玉座の南詔王が写る彝族跳菜舞（1）、彝族大褲脚舞（2）、西域龜茲樂舞（1）、長甲舞（1）が撮影されている（括弧内は写真の枚数）。
- 10) 注（7）と同じ。また以下も参照。『新浪網 (sina.com.cn)』「国内頂尖芸術大師傾力打造新版《吉鑫宴舞》盛裝出閣」（2007年1月18日）ent.sina.com.cn/x/2007-01-18/09531416317.htm〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
- 11) 「吉鑫宴舞門票預訂 | 昆明世博吉鑫園 | 世界三大yan舞」（昆明康輝旅行社、2013年1月30日アップロード）、<https://www.51sole.com/>

- b2b/sides605722.htmlを参照〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
- 12) 注(11)と同じ。なお、この資料では《吉鑫宴舞》の演員が総勢187名を数え、その中には70名のモデルが含まれるとし、演員は雲南の10以上の少数民族地区の他に、瀋陽、内モンゴ、新疆、吉林、四川などから来ていたと説明している。
 - 13) You Tubeには以下の動画がアップロードされている。いずれも短いものであり、《吉鑫宴舞》の一部が断片的に撮影されている。しかし、これらをブログの写真資料と組み合わせることで各舞踊の前後関係や背景音楽を理解することができる。今後の検討課題としたい。「雲南～昆明國宴1、2、3、4」(2009年6月17日、7月11日、7月12日アップロード、合計時間12分47秒)、<https://www.youtube.com/watch?v=7RgrnCMym1U>、<https://www.youtube.com/watch?v=ncV5kYckaYo>、<https://www.youtube.com/watch?v=YZ-dwmddxQM>、<https://www.youtube.com/watch?v=3owHm0cggfU>「雲南省 昆明市 吉鑫复舞 民族歌舞」(2013年12月25日アップロード、18分) <https://www.youtube.com/watch?v=1wgFpuIrZNo&t=37s>〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
 - 14) 『黄安年的博文』「体験“吉鑫宴舞”(2007年4月21日)(一)」(2007年4月21日アップロード) <http://blog.sciencenet.cn/blog-415-2125.html>、同「体験“吉鑫宴舞”(2007年4月21日)(二)」(2007年5月16日アップロード) <http://blog.sciencenet.cn/blog-415-2127.html>、参照〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
 - 15) 『隨意窩』「吉鑫宴舞－中國三大宴舞之吉鑫宴舞」(2008年12月19日アップロード) <https://blog.xuite.net/ecs02153/twblog/expert-view/128592348>、参照〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
 - 16) 『作家張明的博客』「我的青春我的歌(第二部)(十七)」(2011-04-27)、

- http://blog.sina.com.cn/s/blog_483c48b30100qe0l.html
「我的青春我的歌（第二部）（二十）」http://blog.sina.com.cn/s/blog_483c48b301017noe.html、参照〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
- 17) 『zlyang的博客』「昆明赏“吉鑫宴舞”」（2011年11月6日アップロード）。
http://blog.sina.com.cn/s/blog_511782ce0100xue1.html〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
- 18) 「雲南旅行⑧～昆明；中国・雲南吉xin宴舞」（2012年6月2日アップロード）<https://blog.goo.ne.jp/mokoangel616lds/e/dc327d20da15aed370bd973d0fa09d00>、参照〔最終閲覧：2021年10月30日〕。
- 19) 南詔奉聖楽の歴史学的な実証研究については、中純子 2012、林謙三 2017を参照。
- 20) 「雲南餐飲名企世博吉鑫園列入最高法“黑名单”」（2016年1月16日）『昆明信息港』<https://read01.com/dMP5do.html#.YVgFHdrP3IU>、
「大韜律師劉仕強談雲南吉鑫興衰路（上）：高利貸之禍」（2016年1月14日）『唐印』<https://read01.com/4GKGQd.html#.YVgEbtrP3IU>参照〔最終閲覧：2021年10月30日〕。

参考文献

- 陳申・黄自新・唐文（2017）『雲南当代舞蹈發展史（1949-2009）』北京：人民出版社。
- 長谷川清（2018）「文化のグローバル化と祝祭イベントの変容－昆明国際文化旅游狂歡節の事例から」『言語と文化』30号、文教大学大学院言語文化研究科付属言語文化研究所編、283-298頁。
- 林謙三（著）／山寺三知（翻刻・校訂）（2017）「唐代南詔奉聖楽について」『國學院大學北海道短期大学部紀要』34巻、1-12頁。

- 李小妹 (2012) 「深圳中国民俗文化村における『少数民族』の表象」『人間文化創成科学論叢』第15巻、311-319頁。
- 満子 (2000) 「飽含民族文化的吉鑫宴舞」『民族工作』2000年5期：48-49頁。
- 中純子 (2012) 「唐代中晩期における蜀の音楽文化—長安との交流を軸として—」『日本中国学会報』第64集、99-112頁。
- 施惟達主編 (2007) 『態与勢：雲南文化産業研究』昆明：雲南大学出版社。
- 施惟達等著 (2011) 『文化与經濟：民族文化与産業化發展』昆明：雲南大学出版社。
- 王偉年 (2009) 「我国旅游演芸發展的驅動因素分析」『井岡山大学学报社会科学』2009年4期：87-91頁。
- 尹欣・範建華主編 (2010) 『1996-2006雲南文化産業十年報告』昆明：雲南大学出版社。
- 尹欣・範建華主編 (2011) 『2008-2009雲南文化産業發展報告』昆明：雲南大学出版社。
- 尹欣・範建華主編 (2012) 『2010-2011雲南文化産業發展報告』昆明：雲南大学出版社。
- 于漪 (2013) 「民族歌舞の都市化景観—以《吉鑫宴舞》为例」『學術探索』2013年2期：131-135頁。
- 袁禾 (1999) 『中国舞蹈』上海：上海外語教育出版社。
- 張艾 (1997) 「雲南民舞資源開發引起的思考」劉金吾主編『滇舞論壇』雲南人民出版社、63-78頁。
- 張楠 (2003) 「吉鑫集團公司的特色發展道路」張徳文・納麒主編2003『2002~2003雲南文化發展藍皮書』昆明：雲南大学出版社、373-378頁。
- 趙曉瀾編 (2015) 『文化之美』昆明：雲南美術出版社。
- 資華筠主編 (1999) 『中国舞蹈』北京：文化出版社。